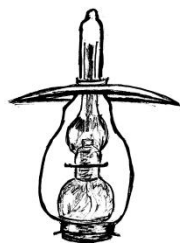


LUCERNO



(Bulteno de la Japana Sekcio de ILEI) n-ro 2 januaro 2011

Feliĉan Novjaron 2011!



La lastan jaron ni, japana sekcio de ILEI (ILEI-JP) fondiĝis post la kuniĝo de Asocio de Lernejoj Esperantistoj (ALE) kaj malnova japana ILEI. Nun en nia sekcio estas 23 membroj kun Internacia Pedagogia Revuo (IPR) de ILEI (internacia) kaj tri sen IPR.

La plej granda tasko por ni sendube estas agadi, aŭ propramaniere aŭ kune, en tiel nomata "eduka kampo". Kelkaj el niaj membroj estas instruistoj kaj ili havas eblecon enkonduki iamaniere Esperanton en lernejojn, kio povus esti ne facila tasko, tamen certe farenda. Ankaŭ ekster lernejoj ni bezonas helpi al homoj malkovri Esperanton kaj eduki ilin.

Ni do konsciante la gravecon de nia laboro, daŭre laboru kaj esperu ankaŭ ĉi-jare. Somere okazos en la urbo Tianjin, Ĉinio, la unua komuna seminario de ILEI-sekcioj en Ĉinio, Koreio kaj Japanio. Tio estos bona ŝanco konatiĝi kun instruistoj, instruemuloj kaj interesigantoj pri instruado de Esperanto en Orienta Azio.

ISIKAWA Tiekō
Sekciestro de ILEI-JP

<今年の主な行事>

- * 2月 12日 (土) ~ 13日 (日) エスペラント中級セミナー2011 愛知県東海市
- * 7月 17日 (日) ~ 23日 (土) ILEI大会 コペンハーゲン (デンマーク)
La 44-a Konferenco de ILEI Kopenhago, 17—23 julio
- * 7月 23日 (土) ~ 30日 (土) 第96回世界エスペラント大会 コペンハーゲン (デンマーク)
La 96-a Universala Kongreso Kopenhago, 23—30 julio
- * 8月 12日 (金) ~ 15日 (月) 第1回日中韓 I L E I セミナー 天津市 (中国)
La 1-a Komuna ILEI-Seminario de Ĉinio, Japanio kaj Koreio
Temo: "Kiel efike instrui Esperanton al azianoj?"
- * 8月 8日 (月) ~ 15日 (月) I L E I 中国支部セミナー 天津市 (中国)
(後半は日中韓 I L E I セミナーと同じ場所で同時に開催)
Seminario de Ĉina Sekcio de ILEI, Tianjin 2011 (Trejnseminario) 8—15 aŭgusto
- * 10月 7日 (金) ~ 9日 (日) 日韓共同開催エスペラント大会 韓国
(第98回日本エスペラント大会 第43回韓国エスペラント大会)

小学校の英語教育をやめてエスペラントを En elementa lernejo enkonduku Esperanton anstataŭ la angla lingvo

『英語教育』11月号（大修館書店）の「読者論壇」に、峯村勝（言語教育研究所）の「小学校の英語教育をやめてエスペラント」。英語教育の問題を述べ、それに続けて『エスペラント教育』の言語教育、外国語教育における教育価値についてはほとんど疑問の余地がない」とし、「エスペラントには次のような教育価値がある」と、次の5点を挙げている。

①「1字1音」「1音1字」でローマ字教育から直結。②学びやすいため、教員研修は3日間とその後の独習で十分。③ヨーロッパ語学習への道を開き、英語学習にも直結。④民族や人類、平和や共存などについて考えることと不可分。⑤地球人の「地球村」の共通語として言語の統一性を学ぶことができる。

そして「次の学習指導要領の改訂は約10年後である。今から改革の準備に取り掛かることが肝要である」と主張している。（Movado 11月号より転載）

<投稿者、峯村勝さんについて>

11月27日、成城大学英语研究会会合（公開）で峯村さんと少し話す機会がありました。エスペランティストではない峯村さんが、小学校の英語をやめてエスペラントを、と言い切っていることに驚き、背景を知って、今後共闘できるのか探りたいと思い、会合への参加を決めました。

上記会合では、中村敬さんと峯村さん、それに名古屋の高校英語教師を加えた3人が、2012年4月に一般書として発行を予定している『中学からの英語教科書』の概要や発行のねらいなどが英語教育関係者に説明されました。その本の学習者用資料に「エスペラントの基礎」を入れてあるということですから、峯村さんもある程度の学習はしているのかもしれませんが。投書の中の②に関連して、「エスペラントの将来は英語の教師にかかっている」とまで言っていました。それについては、正直言って「そこまで言うの？」という気がしないでもありませんが。

峯村さんのエスペラントに関する知識は、主に本から得られたものではないかと推測されますので、最新のエスペラント界を取り巻く現状などをお伝えする機会をいずれ持てればと考えています。峯村さん自身もこれからいろいろ勉強したいと言っていました。もうお若くはないですが、英語辞書編集者として長年英語教育に関係してこられていますので、外国語学習についてもしっかりとしたお考えを持っているようです。私たちも、エスペラント界の中だけで物事を考えていくのではなく、エスペラントの持つ教育的価値をどうやって実証し、世間に訴えていけるか、エスペラント界外の方々とも協力して活動を進めていく必要がありますね。（石川智恵子）

~~~~~

## 受験英語の解毒剤としての世界語

佐々木照央

### Internacia lingvo funkcias kiel antidoto kontraŭ veneno de la angla lingvo celanta ekzamenon

英語の苦手な日本人が大多数だが、得意と思う若者がいる。最近、若者の就職状況が悪化し、私も不安の気持ちでそのような報道番組を見るが、NHKのある番組で、「得意な英語を生かして」就職戦線に挑んだものの雇ってくれない、という話を見た。その「得意な英語を生かして」という文句が私の耳の中でこだまする。

受験英語に全精力を注ぎ込んで高い点数をとって、「得意な英語」などと言う。その言葉を吐いた若者たちの無知と無邪気さを私は嘆いた。はっきりいって今の日本国内での英語教育で、英語を母国語とする人々に太刀打ちできる水準には到達不可能である。また、インド、中国やフィリピンの若者に話し言葉の運用能力で勝る日本人は少ないだろう。げんにその番組でも、日本人の若者より

もインド人や中国人を雇用する、という会社が紹介されていた。

また逆に高度の英語力を備えた日本人でも英語を母国語とする人々との対話において揶揄嘲笑される場合がある。記憶に新しい一例として、不思議な英語事件が鳩山前首相の身に起こって日本のマスコミが騒いだ。「Trust me」と言ったことが不適切な英語だという。他の演説を聞いたかぎりの正直な感想として、鳩山前首相の英語は非常に高い水準にある、と私は思う。英語を母国語とするものでない人がこのような水準に達していれば、称賛すべきであって、言葉尻を捕らえて揶揄すべきではない。嘲笑ですめばいいが、生命に関わることもある。以前、「フリーズ! (Freeze)」と言われて止まらなかった日本人留学生が射殺されたが、これもまた英語を母国語としない者の悲劇である。

受験英語は「得意」と思う者にも、「苦手」と思う者にも災厄である。今の受験英語教育で日本人青年に高い英語能力を求めるのは、無理な要求である。受験の英語力をもって実社会に出すのは、使い物にならない武器をもたせて戦場に送るようなものである。「得意」なものは討ち死にし、「苦手」なものは逃げ回る。これは他の諸外国人との関係で言えば立派な「差別」要因である。もしこれからの日本の会社で英語運用能力が必須として要求されるならば、日本人青年の就職口はますます狭まる。たとえ英語圏に留学した青年で、射殺はまぬがれとしても、英語で法律論争をする力はなかなか身につくものではない。十分理解できないままあいまいな微笑を浮かべて「イエス」とあいづちをうったり、「前向きに対処します」などごまかしたりするのがおちである。

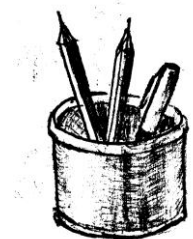
では、昔の日本人は外国語をどのように修得し、どのように諸外国に立ち向かったか？ 私は私の世代についてのみ、見てきたことだけ語ると、商社員たちの外国語はたくましかった。文法も発音も決して良いとは言えなかったが、論争では負けなかった。ロシア語についていえば、ロシア人に立派に立ち向かい、自分の主張を堂々と通す力を日本人商社員たちは身につけていた。(外務省については言わないことにする。) ロシア語が受験と無縁であったことも一つの原因である。彼らには言葉を使う上で最も障害になる「卑屈さ」がないのである。昔は英語以外の外国語も大事にされていた。それで受験英語の弊害もある程度補われていた。他の外国語に自信があれば、英語もまたひとつの外国語として見る余裕が生まれる。それによって、実践に必要な「胆力」ができたのである。

今日の日本のように、英語のみが外国語とみなされる傾向にある時、青年たちは受験英語の弊害から逃れる道がなくなっている。英語の試験の成績が悪いものは英語に対して、また英語をつかう外国人に対して「卑屈」になってしまう。私自身、英語を話すとき何か違和感をもつ。それは若いときの受験後遺症であろう。1977年、国連職員になってニューヨークに勤務するか、ロシア語教師になるか、の岐路に立たされたとき私は後者を選んだ。英語については、英字新聞を読み、ラジオ放送を聴くという生活を続けているが、それを使って生活する気分になれない。いつも知らない単語に出くわす。だから「得意な英語を生かして」などと口にする日本人青年には驚きかつあきれの思いである。

私の見るところ、今の日本人青年の若々しい澁刺とした精神を陰鬱にしているものの一つは受験英語教育である。これまでは中学生からであったが、これからは小学生にまでその憂鬱さをおろしていく。英語の不得手な連中ほど若者や子供に英語力を要求する傾向がある。受験英語は日本人を英語にたいして「卑屈」にする。

「卑屈さ」は日本語の中でのカタカナ英語の氾濫にも如実に現れる。言葉に鈍感な人ほど和製英語を駆使したがるし、日本語の歌の中に怪しい英語を挿入したがる。日本の英語問題は精神病理学の実験分野である。英語に対する特殊な「卑屈さ」を克服することが、まず必要である。それは英語を受験道具から解放すること、および他の言語力の向上によって可能となる。

英語以外の言語をしっかりと学べば、英語を対象化して諸言語の一部と見ることが可能になる。残念ながら、今の日本の教育では高校までは英語だけ、多くの大学でも英語のみの外国語教育に傾斜している。埼玉大学はその典型である。これでは学生の英語力さえ劣化する。だがこの日本の一般大学の状況で英語以外の言語を教えるのは容易ではない。



それに挑戦する意味で、私はエスペラントを大学で教えることにした。2005年4月から今まで続けているので、早6年になる。その間、2007年に東京大学文学部、2009年から東京工業大学(2012年3月までは継続)、2010年から放送大学大宮学習センター、などの大学機関でもエスペラントを教えている。

2005年から埼玉大学で教えるといっても、「エスペラント」という講義題目があるわけではない。私自身の担当講義題目は「ロシア文学」、「スラブ東欧圏の文化」、「ユーラシア研究特殊講義」、「スラブ文化特殊講義」、「スラブの歴史」、「ヨーロッパ学入門」等々である。エスペラントが「帝政ロシア」で誕生したということにかこつけて、これらの講義題目の中で教えることにした。これについては、欺瞞との批判が起きるかもしれない。それを私は甘受せざるをえない。もし非常勤講師の身分であれば、これらの講義題目でエスペラントを教えることは不可能であった。しかし、結果的には聴講した学生たちが不満を訴えることなく、現在に至っている。また、学部の同僚たちが授業参観をして、その効果に賛同してくれた。さらに、石川智恵子さん、堀泰雄さん、田中滋さん、遠井国夫さん、谷島博さん、などが授業参観に訪れてくれ、学生数の多さ、質の高さを実感してもらった。

教え方は2通りで、1つは初歩から講読へ、もう1つは直接講読資料を配布する、というものである。初歩は自作の『速習世界語』を使用し7回程度でそれを終了、次に講読に移る。アンデルセン童話、プーシキン短編、チャーホフ戯曲、チェコ文学などを読む。

他の直接に講読に入るものは、既習者が半分以上いる場合で、未習者には既習者が授業時間外に初歩を教える、ということにしている。たとえば、今年は「スラブの歴史」でリトワニア史の資料を読んでいるが、最初からエスペラント語版の『リトワニアの歴史』と単語帳を配布し、読ませていった。未習者も一月ぐらいで十分に授業に追いついていく。これはザメンホフが未習者との文通に際して、小さな文法説明書と単語帳を添えてやれば未習者でもエスペラントの手紙を読める、とどこかに書いているのに似ている。

埼玉大学での成果は、多くの学生たちが自分の語学能力の再発見をしたことである。それは英語によって自信を喪失させられていたものであった。エスペラントを学習した学生はその後、ドイツ語、フランス語、イタリア語、などの学習に自信をつけ、また英語に対しても新鮮な気持ちで再挑戦している。エスペラントは諸言語の基本文法である。それ故、特殊地域の言語の学習の場合、すでに大きな土台をエスペラントで修得しており、ごく特殊な文法事項のみ学習すればいい。たった7回(90分授業)でその諸言語の大事な基礎が得られるのである。

問題点も多い。せっかく最高度の文学に触れ、エスペラント語も上達してきたのに、さらなる継続をしない者が多い。宝の持ち腐れ、どころか、宝と感ぜないでほったらかしにしてしまう。不毛の土地に蒔かれた種のような運命になる。今年も100名程度受講者がいる。これがそのまま成長してくれれば、日本のエスペラント者老齢化問題も直ちに解決するのだが。

東工大、放送大学では、講義題目も「エスペラント」と正式に名前が入っている。これは他大学の立派な先例になる。どちらも一教室35人程度(正式登録者)である。実際の受講者は東工大の場合25人ぐらいである。東工大では初歩7回のあとアンデルセン童話「ワイルド・スワン」と会話、および環境問題書『B計画』などを配布している。東大エスペラントクラブ出身の久世正彦教授とロシアからの留学生サリフさんが毎回授業後に会話の会合を開催している。

ベトナムで開催されるKSにも東工大生が一人参加する。

いずれの大学でも初歩を7回程度やってから、英語でも読んだことのない優れた古典をエスペラントで味あわせる。その体験は学生に自分の潜在能力を知らしめる。学生たちは英語嫌いが多かったが、エスペラントで語学好きになってくれた。受験という足枷がなければ、語学の才能は開花する。これを実感させることに私の授業は成功している。ただし、才能を磨くのは自分自身の克己心である。何事も同じであるが、エスペラントの価値は語学面の荒海で翻弄されればされるほど深く実感されるものであろう。

「荒海や佐渡によこたう天の川」

## Vidpunkto de eduko mankas en la edukado de la angla lingvo

50歳になったときに、高校をやめることにして、東京の三友社出版に行くことにした。そこで4年働いた。この出版社は、文部省の教育政策に反対する新英語教育研究会という団体の機関誌「新英語教育」を出していた。この会の会員だった私は、当然この出版社とも親しく、1970年ごろ「なるほどわかる入門英文法」というのを出版してもらい、次に「歌え我らの第九」という前橋第九合唱団の本を出してもらった。この本は、この種の本には珍しく5000部は売れ、先日アマゾンの古本を見たら4500円の値段が付いているところがあり、びっくりした。その後宮崎駿の映画をもとに「ナウシカ」を出した。これは、映画運動をやっていた私が、「ナウシカ」が高校生に人気があるのを知り、夏休みテキストにしてはどうかと提案したのがきっかけだった。それ以前の夏休みテキストは、イギリスの昔話みたいなものがほとんどで、現代の高校生の感覚にぴったりするものはなかった。「ナウシカ」以降、各社が、新しい企画に取り掛かったように思う。「ナウシカ」は大人気で、数十万部売れ、三友社のドル箱になった。然し会社は火の車で、そのうち私が社員になったため、たいした印税はもらわずに終わった。その後「天空の城ラピュタ」を出し、これもかなりの売れ行きになった。その後著作権を持っていた徳間書店が、自分でやった方が儲かると、三友社に出版を許さなくなったので、宮崎シリーズの出版は2冊で終わった。

「ピースメッセージ」という本も出した。1982年だったか、反核40万集会が東京で行われ、そこに参加していた外国人7人からメッセージをもらった。それを「新英語教育」で紹介したところ、修学旅行などでピースメッセージ集めをする運動が日本全国に広がり、80-90年代の大流行になった。本家を奪われてはまずいと、ピースメッセージ集めの24ページほどのテキストを作り、これもかなり売れた。最近私が、世界大会でメッセージを集めたのは、これを思い出したためである。

三友社は、高校の英語教科書「コスモス」を出し、かなりの人気だった。その後底辺校向けの「ワールド」、進学校向けの「アトラス」を出した。私はこの3種類の教科書の編集に携わったほか、自分でも執筆して大いに貢献した。これらの教科書のコンセプトは、「良い教材が良い授業を作る」であった。新英語教育研究会では、「どう教えるか」より「何を教えるか」、更に「なぜ教えるか」がテーマだったから、教材に何を选ぶかに最大の力を注いだ。

当時、へえ、と思ったことが2つある。一つは、音声の吹き込みである。英語の吹き込みの「声優」を派遣する会社があり、「声優」の条件は、「アメリカ人で、東部の出身」ということだった。他の国や地域の「声優」を採用すると、教師から「純粹の英語ではない」と苦情が来るのだ。三友社では、例えばオーストラリアがテーマの教材には、オーストラリア出身の「声優」を使ったが、多分人気がなかったことだろう。「声優」にいくら払ったかの記憶はないが、かなり高かった。安い「声優」を使うと、失敗をしたりして読み直したりするので、時間いくらで雇うから、かえって高くつく。教師がテープに文句をつけるのは、自分で読みの指導をしないで、「声優」におんぶにだっこの卑屈な姿勢から来る。今では、英語の多様性が言われるが、多分テープに対する考え方は、前と同じだろう。

もう一つは、教師用指導書である。私は、良い教材を集めたのだから、その教材を生かせるよう、その背景などを中心にした指導書を作ることに腐心した。例えば、キング牧師を扱ったものであれば、公民権運動とか、差別の実態を示す写真とか。

「コスモス」の学校では、これは受けたようだった。「コスモス」が対象とする学校では、生徒をどのように引き付けるかが焦点で、これを採用する教師は、意識的でありそういったものをほしがった。



ところが進学校むけ「アトラス」では、この方針の指導書は人気がなかった。営業からあがってくる苦情は「語法の解説が少ない」というものだった。語法などは、辞書にいくらでも出ているから、そんなものは辞書だの文法書を見ればよい、と私は思っていたが、現場では、それこそが必要だったのだ。その後、大学で教えるようになって生徒に聞くと「高校の授業では、教材の内容についての授業はほとんどなく、訳して、文法の説明をし、単語を覚えて終わり」という。これが、進学高校での英語の授業の実態だった。これでは、生徒は、精神が豊かにならないから、英語の授業から学ぶものは何もないに等しい。

日本福祉大学で、その後 8 年間、非常勤講師として教えた。7 年目に入るときに、経済学部の英語の授業が、英会話学校に丸投げになった。経済学部には、専任の英語の教師が 1 人、他は皆非常勤講師だったが、その 1 人は、新しくできた福祉経営学部に行き、一緒に移籍した非常勤講師 3 人を除いて皆首になった。私は幸い首が繋がりに、その後 2 年働いたが、何が原因か、時間数が少なくなり、やめることにした。

丸投げされたあと、教官室には会話学校から来た先生が数人たむろするようになり、教えていたのは、要するに会話だった。大学は、学生が英検だったので点数が上がり、就職に有利であることを狙って、英語「教育」を放棄したのだった。しかしそれも当然だった。非常勤の教師の授業を見ると、くだらない教材（もちろん市販のもの）で、教師は教壇の後ろでテープレコーダーを回しては、答えあわせをしているだけだった。時には、黒板に、人称代名詞の変化が書かれていることもあった。経済学部の学生は、本当にできないのが多かったから、人称代名詞の変化も言えないようなものもあるのはいたが、大学に入っても中学の最初の授業の復習では、学生もたまったものではない。つまり、英語学校に丸投げされても仕方がないほど、英語は「教育」ではなかったのだ。

では私は何を教えていたのか。私は、英語を通して日本の近代史を教えることにした。教材は皆自分で作った。前期は「ハワイ」。学生は、なぜハワイに多くの日系人がいるのか知らない。明治元年から貧しい日本からハワイに移民が行き、やれやれ生活が安定してきた、と思ったときに戦争になり、財産は没収。日系人は、アメリカへの忠誠心を示すために率先して兵役を志願し戦った。後期は「フィリピン」。こちらへも日本人は移民して行った。そして戦争、日本軍は残虐行為を働き、自らも 50 万人の戦死者を出した。ところが戦後は、知らぬ顔で、経済侵略し、挙句はジャパユキさんとして女性を性の奴隷に。ハワイから日本人が締め出されてからは、アメリカの植民地になったばかりのフィリピンから労働者が送り込まれた。ハワイとフィリピンは、日本を中心として結びついていたのだった。

教材は、毎週配った。授業では、背景の説明に多くの時間を費やした。英語ができるようになったかはわからない。社会科の授業のようだったから。然しこの授業は、学生の魂を揺さぶった。学生は、自分の無知に気付き、勉強する気持を培っていった。ある学生は本当にハワイやフィリピンに、自分の目で確かめたいと出かけて行った。ある学生は「先生の授業には思想があった」と最後の感想に書いてきた。これは本当に嬉しい感想だった。

学力のない学生は、生きる力が不足している。学ぶことに意味もわかっていない。こういう学生に、いくらテープで反復練習させても、それはそのときだけのことで、実力、学力としては何も定着しない。魂を揺さぶって、自ら勉強する気持にさせなければ、何の意味もない。だから、私の授業では、表面的な英語の学力は付かなかつたかもしれない（本当はそんなことはなく、その面でも工夫はしていたのだが、ここでは書かない）が、確実に心は変えた。だから、学生たちは、本当に良く出席をした。「先生の授業は休むのがもったいない」「毎週新しいことを知れると思うと休む気になれなかった」とも言われた。どの学生の目もきらきらして、眠るものは本当に少なかった。一時間目の授業にクラスの学生 20 人全員が、始まる前に揃ったこともあった。

朝日新聞で、英語教育に関して何回か識者の話が載ったが、あまりのくだらなさに、反論も馬鹿馬鹿しいほどだった。欠けているのは、「教育」の観点だ。「教育」がすっぱり抜けている。英語の授業を通してどんな子どもを育てるかと言う観点がまったくない。英語が「技能」になっている。だから、英会話学校に丸投げという考えも出てくる。どの教科でも、どういう子どもを育てるのか、というのが最重要だが、文部省は、そんなことを重視する教師がいやだから、教師を締め付け、考えさせないようにする。民間の教育研究会などには参加させない。敵視する。

昔は、英語は差別選別の道具だとよく言われた。今は、英語は、生徒に人間を辞めさせる道具になっている。英語で劣等感を植え付けられ、自分はダメな人間なのだと思わせる道具になっている。教育は、その子どもの個性を伸ばし、人間として立派にしていくのが目的だが、今の「英語教育」は、それに逆行し、子どもをダメにしている。「エスペラントやらない？」と誘っても「英語もできないのに」という答えが多いのはそのことを示している。英語で自信が付き、目が開かれるのではなく、閉じこもらせている。小学校から英語をやることで、ますます英語嫌いが増え、英語による劣等感の助長が進むのではないか。「英語ができると国際人」のキャッチフレーズで、「英語ができないから国際人失格」「外国は怖い」「オレは外国に行かない。日本で安住」という内向きな考えがどんどん蔓延している。

私は英語でご飯を食べていたから、仕方なく英語を教え、それでもなんとか「英語で平和を」「英語で世界へ」と目を開かせるようにしてきた。平和メッセージもそうだし、ハワイやフィリピンの授業もそうだ。しかし、英語には当然限界がある。何しろアメリカの言葉だから。そこで、いまや、食べることを考えずに、エスペラントをやっている。これが、学校に導入できれば、どれほど子どもたちが救われるだろう。学級嫌いや登校拒否もずいぶん少なくなるだろう。そのためにがんばらなければならないが、まだまだ道は遠いね。



## 日本の英語教育——個人的な体験——

牧野三男

Edukado de la angla lingvo en Japanio —el mia sperto—



### <私の中学時代>

・戦時中の英語教育は学校差が激しかった。東京での私立中 1 時代の英語教師は誠実な方だった。英語学習第 1 時間目に Alphabet の発音、大文字・小文字の活字体・筆記体の読み書きを一気に学習。その翌日は Test という Speed 授業。英語も日本語も他教師より抜群に美しい彼の声を授業で聴くのが楽しみだった。

その恩師の口癖は「外国語は単語だけ覚えても役立たない。文章を丸ごと暗記しなさい。教科書全体を暗記しておけば、将来必ず役立つ。」だった。その教師は間もなく応召され戦死した。

中 2 の 4 月。東京大空襲で裸一貫になり秋田に疎開した。そこの県立中学での英語教育は無残の一言。教師も生徒も英語は敵性語と称して学習意欲はゼロに近かった。同じ中学英語教師二人に天国と地獄を見た。

・敗戦直後、移住先の熊本で中 3 の私は、私立中学の学僕（子供の雑役夫）になり、働きながら学業を続けていた。給与ゼロ。宿直室宿泊代、寮の食費、授業料共に免除で授業は受けられ学歴も保証されるが、授業以外は総て学校・教師達の雑役に追われた。酷い食糧事情で栄養失調寸前の時代、孤独な私を支えて下さったのが英語教師でクラス担任の恩師夫妻だった。私を息子のように可愛がってくれた。その奥様は今 96 歳で名古屋市に健在。

65 年後の今でも年賀状で交流している。

学僕の仕事の合間を縫って、内緒で学校近くの米軍キャンプに出掛けた。門番兵に話し掛けて英語の **Alphabet** の発音を教わった。中1の時、教科書全文を暗誦していたのが役立った。それにしても、英語と米語の発音の差には驚いた。更に驚いたことは、米軍兵は活字体は書けても筆記体は書けない人が多いことだった。

#### <私の大学時代>

・旧制五高（熊本大学法文学部・理学部）の尊敬すべき英語教授の言葉が忘れられない。「日本の学校の外国語教育には会話は含まれない。ブロークンでも良い。外国語を読み、美しい日本語に訳せればそれで良い。」

大学では 英語・独乙語は必修。仏・露語は選択だった。私は欲張って仏・露の授業も1年間受講した。外国語学習の目標は、外国語を通して他国の優れた文化に触れること。己れの思考力を鍛えることの2点にあった。尊敬すべき英語の恩師が最初に採用した **Text** は「ジキル博士とハイド氏」。彼の美しい日本語訳は正に文学そのもので、毎時間学生達を魅了した。彼は五高合唱団 **Freie kunst** の指揮者でもあり、卒業生達の尊敬の的だった。

・同じ大学の助教授で頭の切れる怖い教師がいた。彼の英語教育観は「生徒は勤勉たるべし。すらすら日本語に翻訳出来るよう予習して来る義務がある。授業では上手に訳するのが当たり前。」という秀才の発想であった。予習不足で和訳が行き詰まろうものなら「この私を侮辱する気か！」と怒り狂った。彼にとっての良き生徒とは、彼の意に添う良き奴隷に思われた。私も一度酷くけなされプライドを傷付けられた。その日を最後に彼の授業とは縁を切った。必修単位は他の温厚な教授に切り替え、育英資金・授業料免除ストップを切り抜けた。単位が不足すれば総ての免除恩恵が失われるからである。

英文科の優秀な友人達は、頭の切れる助教授の横暴にも良く耐えて単位を 取得した。学生寮で私と同室だった英文科の秀才は、助教授そっくりの人格者 だった。3人の同室者との対話はゼロ。朝から晩まで英語学習意外には一切興味なし。同室の仲間がどんなに困っても無言で助言を無視し続けた。私はその友人ともキッパリ縁を切り、寮を出た。

彼は大学卒業後、東大大学院英文科に進学。大学院卒業後、母校の大学で英文科助教授にまで出世したが、同窓会には一度も参加しなかった。生涯独身で孤独な教師だったらしい。これは英語教育の本質から外れた、最も極端な事例であろう。学問は立身出世が主目的ではない。人格陶冶こそが最終目標であり、成績の上下がそのまま人物評価には当てはまらない戒めの事例でもある。

大学入学式での総合大学学長訓示が私の日記に記されていた。単位取得の注意の一節である。「諸君の大学は旧制高校の建学精神をそのまま引き継ぐ。学問を立身出世の具となすなかれ。卒業後、社会の人々に必要とされる人間となれ。そのための人格陶冶が大学生としての諸君の責務である。」  
「大学の単位選択制とは良き教師を選べることである。難しいことを難しく教える教師は並みの中の教師。易しいことを難しく教える教師は最低の下の教師である。難しいことを判り易く教えられる教師こそが尊敬すべき上の教師である。諸君の重要な仕事は、生涯を通して尊敬できる良き師と友を、在学4年間に獲得することにある。そしてその恩師と親友から学ぶ最大の収穫は、尊敬できる人柄を学び取ることである。」

#### <保護者時代>

娘が通学していた女子校は、英語弁論大会の全国大会入賞シード校だった。東大合格率トップ級の有名校の教科書と同じものをわざわざ使用し自慢にしていた。その内容の 高度なものには恐れ入った。中2の娘が英語の宿題で前置詞問題数十個が判らず、せがまれて一度だけ宿題に付き合った。とこ



ろが満点を確信していたその回答が ほぼ壊滅状態。その間違いの理由は不明のまま。点数の悪い生徒は全員廊下に立たされ体罰を受けたと娘から恨まれた。その話を聴いて私は、その学校の英語教育に強い疑問を抱いた。家庭教師に他校の英語教師を頼んだが、宿題解決には歯が立たず、結局その学校の英語教師の自宅へ個人レッスンに通わせた。少数の英弁入賞者の影には、このようにして泣かされていた生徒達が半数以上を占めていた。

同じ学校で英語を教えていたアメリカ人教師は体罰こそなかったが、ir の巻き舌の米語発音が上手く出来ないクラスはいつも叱られていた。完全にアメリカ式に発音しなければ不合格だったのか？それとも個人的な義務感からだったのか？

一方、私が世話になったフランス人神父は英語を非音楽的な言語と批判していた。特にアメリカ式 ir の巻き舌の発音は、一寸聴いた だけで背筋が凍るほど気持ち悪いと嫌っていた。この両者に関わっていた生徒達は、このような英語教育から何を感じ取っていたのだろうか。

#### <英語教育の目標>

日本の英語教育の従来目標は、外国語学習を通して日本語の美しさをより深く理解することにあつたと思う。自国の伝統文化に目覚めてこそ外国語学習をした意味がある。受験の必修科目だからとか、外国人相手の商いに便利だからとかは、明治以降日本の学校で受け継がれて来た外国語教育の主目標とは別次元の問題である。

・先ず母国語を尊重し、国際相互理解は「国際補助語 Esperanto」でと考えた Zamenhof 博士の基本的な考えが如何に大きな意味を持つかは、以上の私の狭い英語学習体験からだけでも充分理解して頂けるものと思う。

~~~~~

Esperanto furoras en la projekto de multlingva korpuso.

Salikh Zakirov

エスペラントは多言語コーパス（言語処理）のプロジェクトで活躍している。

例えば“TATOEB A”プロジェクトにおいて

Progreso de komputiloj jam ŝanĝis multajn terenojn de nia vivo, sed ilia potenco ankoraŭ ne estas plene realigita. Ankaŭ en la fako de lingvistiko kaj lingvoinstruado la komputilaj rimedoj povas helpi, kaj novaj manieroj por tio konstante aperas. En ĉi tiu artikolo mi volas prezenti la elektronikan korpuson de frazoj kun tradukoj, kiun ellaboras la projekto Tatoeba [1]

(la nomo signifas "Ekzemple" en la japana).



La projekto Tatoeba celas kolekti frazojn en diversaj lingvoj kun iliaj tradukoj.

Dulingvaj korpusoj estas konataj delonge, sed ĉifoje la cello estas pli ĝenerala kaj ne limigas sin al du lingvoj. La projekto kolektas frazojn en ĉiuj lingvoj de la mondo. Por subteni multlingvecon, la korpuso estas strukturita ne kiel paroj de frazoj, sed kiel grafeo, kie ĉiu frazo povas esti ligita kun ajna nombro de aliaj

frazoj, sendepende de lingvo. La liberaj ligoj inter frazoj ankaŭ ebligas uzadon de iu lingvo kiel pontolingvo, por produkti frazparojn en iuj ajn du lingvoj. Notindas, ke ĝuste la pli vasta celo de projekto -- ĉirkaŭpreni laŭeble pli multe da lingvoj -- ebligas konekti eĉ du malgrandaj lingvoj inter si. Ankaŭ Esperanto povas roli kiel pontolingvo en la projekto. Eble ĝuste tio allogas esperantistojn kontribui al la projekto.

La grandaj celoj postulas grandajn penojn. Por atingi la celojn, krom kerna grupo de administrantoj kaj programistoj, por la projekto Tatoeba laboras nur volontuloj. Nun pli ol 3000 uzantoj estas registritaj ĉe la retejo, el kiuj plurdekoj aktivadas ĉiutage. Ĉiu kontribuanto aldonas frazoj kaj tradukoj nur en la lingvoj, kiujn li regas, sed malfermiteco de la sistemo garantias, ke poste ĉiuj datumoj estos uzeblaj kune. La tutan datumbazon de frazoj oni povas senpage elŝuti kaj uzi laŭ la permesilo CC-BY, kiu efektive postulas nur unu kondiĉon: oni devas menciigi, ke la datumoj devenas de la projekto Tatoeba. Krom tio, iu ajn uzo de datumoj estas libere permesita.

Oni ankoraŭ ne scias veran potencon de la multlingva korpuso, sed malfermita datumbazo ebligas iun ajn eksperimenti kaj uzi la frazojn en iu ajn manero imagebla. Fakuloj pri maŝintradukado kaj lingvolernantoj jam montras interesiĝon. Aparte bone frazparoj taŭgas por unu maniero de lingvolernado nomata spacita ripetado. Kelkaj komputilaj programoj, ekzemple Anki, Mnemosyne k.a. uzeblas por tio. Efektive spacita ripetado estas lernado per fulmokartetoj, sed kun tutaj frazoj anstataŭ apartaj vortoj, kaj kun la komputilo kiu zorgas pri ordo, en kiu oni studas kartetojn.

La projekto Tatoeba komencis sian historion en 2006 jaro, kiam la fondinto Trang Ho transprenis la bontenadon de Tanaka-korpuso, kiu tiam enhavis ĉirkaŭ 150 mil frazparojn en la japana kaj angla lingvoj. Dum kelkaj jaroj ŝi unupersonale evoluigis la datumbazon kaj la retejon, sed poste kelkaj studentoj pri komputiko aliĝis. Ekde la jaro 2010, populareco de retejo Kreskas eksponente. Tamen, ĝis hodiaŭ la tutan laboron pri la retejo oni faras en sia libera tempo. Trang ne rifuzas eblecon komercigi la projekton, sed ŝi substrekas ke komercigo okazos nur se troviĝos malfermita kaj senriproĉa etike maniero fari tion.

Danke al aktivaj kontribuantoj, la korpuso nun havas pli ol 600 mil frazoj en 81 lingvoj, el kiuj 11 havas po pli ol 10 mil frazoj. Esperanto havas fortan kaj fervoran komunumon en la projekto, kaj nun estas la tria lingvo laŭ la nombro de frazoj post la japana kaj angla. Tamen se oni rigardos relativan staton, evidentiĝos, ke Esperanto havas la plej grandan nombron de kontribuoj. Aliaj popularaj lingvoj estas la franca, germana, hispana, pola kaj la rusa.

Unu el la mesaĝoj de la projekto estas alvoko por kontribuoj. Aparte grava estas stato de jam kolektitaj japanlingvaj frazoj, kiuj bezonas provlegadon de gepatraj parolantoj de la japana. Japanaj esperantistoj estas en la plej bona pozicio por helpi al la evoluanta projekto.

[1] La projekto Tatoeba, <http://tatoeba.org/epo>

[2] Pri la projekto Tatoeba, <http://www.drumbeat.org/project/tatoeba-project/about>
(angle)

~~~~~

## 動詞語尾で「話し手」の立場を重視する

### — エスペラント文法再考 —

2010-11 柴山純一

#### 0. はじめに

エスペラントの文法の説明の際に、よく学校英文法が参照される。もう少し柔軟に考えてみたい。ここでは動詞語尾 (as, is, os, u, us) をとりあげる。

#### 1. 時制とは「話し手」の頭にあるもの

語尾 as, is, os が各々「現在、過去、未来」というのは何にとつての時間か。これは、「主語」についての時間と説明されることが多い。しかしこれらは、「話し手」(あるいは「語り手」)の意識が反映された時間である。

例えば、Li ne venos. (=彼は来ないだろう)、というのは話し手の意識での未来。そして、Ŝi diris, ke li ne venos. (=彼は来ないだろうと彼女は言った)、というのは、li ne venos. と話をした人、すなわち ŝi=彼女の意識での未来といえる。従来 of the grammar では「間接話法 of the times の時制は。。。」とか言って覚える項目になるが、話し手が交代しても、動詞語尾は話し手の意識、と考えると分かりやすい。

一方、分詞 ant, int, ont, (受身の分詞) at, it, ot は、話し手ではなく、その動詞がかかっている語 (名詞、代名詞) 自身の時間に対応している。kuronta hundo (=走りだそうとしている犬) といえは話し手の意識を越えて、hundo について言っている。

#### 2. 「話し手」の強い意志 u と弱い意志 us

語尾 u, us は「命令、仮定」と説明されることが多い。これらは両方とも「話し手」の意志の表れで、ただし、u は強くて現実界を動かすもの、us は弱くて現実界にはねかえされるもの、と考えることができる。

語尾 u では、例えば (Vi) iru. (=行け) は「話し手」が主語である vi (=あなた) に強い意志を押し付けている。Ni iru. (=私たちは行こう) は「話し手」が話し手と同化できる人たちである ni (=私たち) に強い意志を押し付ける、Li iru. (=彼を行かせなさい) は「話し手」が li (=彼) に強い意志を押し付ける。

これは、複文の際にも当てはまる。La prezidanto deziris, ke la parlamentanoj agnosku la leĝon. (=大統領は、議員が法案を認めることを望んだ) は、agnoski (=認める) ことに強い意志をもっているのが大統領であることを示す。

それに対して、語尾 us は、例えば Se mi estus birdo, mi flugus al vi. (=もし私が鳥なら、私はあなたのところに飛んでいくのに、実は鳥ではないから飛んでいけない) は、話し手である私に esti birdo (=鳥である) という意志はあるが、現実にはねかえされて鳥になれないこと、飛ぶことができないことを表す。Ĉu mi povus iri? (=私は行く事ができるのでしょうか)、は行きたい話し手が弱く言い出す状況を表す。



## エスペラント 中級セミナー 2011

2011年2月12日(土) ~ 13日(日)

愛知県東海市立勤労センター

日時 ◆ 2011年2月12日(土) 13:30 ~ 2月13日(日) 12:00

クラス ◆

### 【 柴山純一さんクラス 】

あなたの住んでいる/生まれた/育った/旅した町やお祭りなどを、外国人へ説明するつもりでエスペラントで事前を書いてもらい、クラスでは相互批評、添削、会話などを行います。「ウィキペディア」などで記事を探して、翻訳+アルファで書くのもいいでしょう。

### 【 山川修一さんクラス 】

日本語の本を1冊読み、その内容を外国の知人に紹介するエスペラント文(300語以内)を事前に書いていただきます。クラスではそれを語法や文法の観点から検討するとともに、紹介された本について皆でエスペラントで話し合います。その他、中級文法の学習ポイントを日本語で解説します。日頃の学習上の疑問にも答えます。

※お申込み時に、受講クラスをお知らせください。

※事前課題の詳細については、お申込み後に個別にお知らせいたします。

講演 ◆ 「文法のなりたちを考える」 柴山純一さん

「話し書くための文法」 山川修一さん

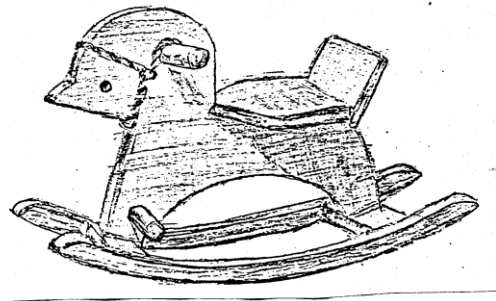
参加費 ◆ 5,000円(宿泊込、食事別)

■お申込み方法 (申込〆切 2011年1月30日)

郵便振替用紙の備考欄に、「中級セミナー参加希望」 ①住所、②氏名、③電子メールアドレス、④性別、⑤受講クラスを記入し、下記口座宛に参加費をお振込みください。

00130-1-11325 日本エスペラント学会

また、電子メールでのお申込みも受け付けています。



☆ LUCERNO に原稿をお寄せ下さい。

☆ 会員相互の意見交換や情報交換に ILEI-JP のメーリングリストをご活用下さい。

ILEI-JP 代表 石川智恵子 [isksanjo@ff.e-mansion.com](mailto:isksanjo@ff.e-mansion.com)  
ILEI-JP 機関紙編集 松木義信 [myoshi@abelia.ocn.ne.jp](mailto:myoshi@abelia.ocn.ne.jp)